

株式会社 マイス

顧客の仕様を練り直す、こだわりの オーダーメイド自動車生産設備メーカー

社長 酒井 高雄



(株)マイスは、オーダーメイドの生産設備や電子制御装置類のワンストップメーカーである。スイッチ自動組立機や、水晶振動子検査装置、電子部品自動搭載機ほか、数多くの生産設備製作の実績を持つ。従業員数は社長を含めて3人という小所帯ではあるが、ものづくりに対するこだわりは大きい。「机上の設計だけでモノは動かない」と、顧客の仕様を練り直し最適な設計提案を行うことも度々である。高度な知識と経験に基づく優れた技術力、そして、設計から組立、配線、制御、据付までほぼ外注することなく、ワンストップでサービスを提供できる強みがある。そんなマイスが製作する装置類は、シンプルで低価格でありながら、使い勝手と信頼性が高く、見た目の美しさにも定評がある。

■ “何か面白いことをやってみたい” との想いで起業

酒井社長はかつて、大手光学機器メーカーの生産設備部門に26年間在籍していた。そこでは、切削や研磨、きさげ加工といった、ものづくりの基礎となる技能を身に付けると同時に、専門的な光学知識や機械設計の知識、装置作りのノウハウを幅広く学んだ。

「職場には、旋盤やフライスといった工作機械のほか、塗装装置やめっき槽、ガラス溶融炉など多分野の設備がありました。それぞれに専門の技能者がいて、彼らはいつも先生役となって多くのことを教えてくれました。何でもゼロから作り上げていくので、ものづくりを学ぶにはいい環境でした」と当時を懐かしそうに振り返る。現在の装置作りのベースはその当時身につけたと言う。

充実した職場環境にありながら、独立した理由を尋ねると、「何か面白いことがやりたくて起業しました」と酒井社長は語った。

マイスは1991年3月、品川区大崎で設立され、2000年に高津区宇奈根に移転し現在に至る。

■ こだわりが顧客の信頼を勝ち取る

目論見が外れたテープフィーダーの開発は経営を圧迫した。その後しばらくは資金繰りに苦しみ、眠れない日々が続いた。事業が軌道に乗り始めるのは、設立から6年が経過してからである。「携帯電話の普及とともに忙しくなりました。その制御用の部品である、水晶振動子の自動検査装置の製作を請け負ったことによります。携帯電話の出荷は2・3年周期で波があっ

ている。社名の由来は、創業者二人の干支が子(ねずみ)だったことに因み、その複数形英単語の「Mice」を充てている。

酒井社長が取り組んだ“面白いこと”の第一弾は、プリント基板への電子部品の供給装置である、テープフィーダーの製品化だった。会社設立と同時に取り組んだ初の自社製品開発である。

「電子部品は、テープフィーダーと呼ばれる専用の供給装置にリール状に装着されています。当時はリールを使い切るとその都度、装置を止めて交換していたので、そこを自動化する装置を作れば当たると考えました。共同開発のスポンサーを探しながら、開発を進めていましたが、じきに資金不足で行き詰まってしまいました。結局、当時の市場には必要とされず、自分の思い込みだったと後になって気づきました」

こうして、初の自社製品は日の目を見ないままに頓挫したのだった。

で、繁忙期はほとんど休みを取ることができません。当時は黙っていても注文が入る時代で、大手スイッチメーカーからの大掛かりな仕事も重なり、年間の休日が10日にも満たない状態が続きました」

その頃の売上は3人で3億円近くにも達したという。1人1億円もの売上である。そして、当時の顧客は今もマイスのリピーターとして仕

